

第 20 期 卒業エッセイ

自分を知る

第 20 期生 有田 勝海

小野ゼミに入会してから約 2 年、なんとなくゼミ長になってから約 1 年半が経ち、小野ゼミ生として過ごす時間も残りわずかとなってしまった。果たして私は、入会当初に思い描いていた理想の自分に近づくことができているだろうか、できていない。「だろうか」という疑問表現を使うのが恥ずかしくなるくらいには、全くもって変わった感覚が無い。杉下右京のように賢く、クリスティアーノ・ロナウドのようにストイックで、中田敦彦のようにプレゼンができ、伊坂幸太郎のように文才があり、大空翼のように人望が厚い人間になっている予定であったが、それは 3 回生まれ変わっても叶う見込みが無さそうだ。現実というのは残酷である。(ただ、自分の変化に気づくということは案外難しいので、「お前成長したよ」と思ってくださいの方がもしいらっしゃるならば、ぜひ積極的に褒めてください。きっと喜ぶます。)

しかし、この 2 年間、小野ゼミという恵まれた環境を無駄遣いしてしまったかという点、全くそんな風には思っておらず、むしろ実りの多い時間を過ごさせていただいたと感謝している。数多くの学問的な学びや一般教養的な学びを得ることができただけでなく、小野ゼミで過ごした時間は、私にとって、重要な「自己分析期間」になった。入会以前の私は、正直なところ、自分自身と深く向き合うことがほぼ無かった。しかし、小野ゼミの活動に自分なりに励む中で、自分には何ができて何ができないのか、何が好きで何が嫌いなのか、そもそも自分はどのようなやつなのかをよく知ることができた。

まず、私は怠惰だ。モチベーションの波が激しく、目標をたてて、意欲的に努力をすることは難しい。基本的に、危機感を原動力に動く。こんなやつがゼミ長だったことが、小野先生の不満を募らせる最大の原因になっていたような気がする(というか、直接そう仰られた)が、これはわかっていれば対策ができる。最近では、モチベーションや目標と関係なく、ルールを作り、行動を習慣化することで、ある程度生産的な日々を送ることができている。「そんなこと最初から気づいてやれよ」と言ってしまうまでもだが、私にとっては大きな一歩だ。また、得手不得手は一旦脇においておくとして、私は何かを深掘って考えることが好きみたいだ。一つのことを考え出すと、案外集中力が長続きする。自分をただの勉強嫌いだと思っていた私からすると、これは世紀の大発見だ。

自分について深く理解できたことは、自分の将来を考える上で非常に参考になっているし、就職活動にももちろん役立った。自分の性格や志向性にあつていそうな会社から内定をいただき、それなりに自分の将来を楽しみに思っているのは、間違いなく小野ゼミで過ごした時間のおかげである。そして何よりも、小野先生をはじめ、大学院生や 19 期の先輩方、20 期の同期、21 期の後輩達のおかげである。この感謝は、言葉だけでなく、小野ゼミで知った自分を受け入れながら活躍することでお伝えしたい。